

階層秩序と自己実現の両立性

－希望と評価のエスノメソドロジー

経済総合分析株式会社 木下博之

1. 目的

この報告の目的は、社会学的分析を元に、より妥当と考えられる社会の方向性を示すことである。良い面は受け入れ、悪い面は正すという方向性で提案をする。階層の存在を踏まえ、階層特有の社会規範を示す。階層を解体するのではなく、その存在を踏まえつつ、個人的階層上昇が社会的に容認されうるような社会的機運を醸成すべきであることを示す。それにより、閉塞感は打破され、人類の持続可能性が向上することを示す。なお、本論文で論じる、「階層」とは、「意味」的なものであり、経済的豊かさという面においては、それは「生存」という基本的問題であるため平等であることが望ましいと考える立場を取る。

2. 方法

社会を、階層概念、および、階層と個人の関係性に着目し分析することで、問題点、および、解決策を提示する。まず、何が不平等間を醸成するのかについて既存の概念や社会の実情を踏まえて分析する。また、社会は、権威層（上流層）、概念共有能力層（中流層）、原社会層（労働者層・その他）に分類されることを示し、問題点を具体化する。

3. 結果

分析の結果、以下の二つのことが明らかになった。理由とともに示す。

1. 階層は人為的に解体されるべきでない

階層化は、自然発生的な現象であると、歴史的推移から考えられる。また、大半の構成員も、自己の所属する階層を「社会」として受け入れている。階層の解体により、大半の構成員は、自己の帰属心を満たすことができなくなり、社会の持続可能性を低迷させうる。こうした階層分化そのものを是正することが、解決策であるとは考えがたい。

2. 個人的階層移動は受け入れられるべきである

構成員が個人的に階層移動を望むのは、その個人がその階層に所属し続けることに問題を感じたからである。階層上昇により、個人的問題は解決されうる。そうした個人は、上昇志向的感覚の持ち主であると考えられる。階層上昇が認められなければ、個人的に不満を感じつつ社会生活を送ることになり、階層に負の感情をもたらす要因となる。階層上昇が認められれば、個人的な不満・不安は解消し、能力を社会全般に生かそうとする。そのことにより、社会に正の貢献がもたらされる。社会の持続可能性も上昇する。現状において、個人的な階層移動に対して、社会により、硬直的、否定的な判断が為されがちであるが、その是非は、より妥当かつ柔軟に判断されるべきである。

4. 結論

以上から、階層構造を維持しつつ、個人的階層移動が社会的に容認されることで、社会の安定と個人の期待の実現は両立することが示される。持続可能社会（社会の持続可能性）と個人的願望実現は同義であり、両立可能である。社会全体、個人どちらの視点からも、状況は好転する。